

月刊 島民

中之島

Vol.54 2013 1/1

●iPadサイズ(と、ほぼ同じ)

橋を渡る人の「街事情」マガジン

月刊島民 中之島 Vol.54号 2013年1月1日発行

編集・発行人 吉田健一(40B) 編集発行 月刊島民プレス

〒5300004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階 定価0円 Printed in Japan

蔵屋敷の「常識」。



ナカノシマ大学

「ちゃんとした店って
なんや? 会議」

江弘毅・吉村司・石原卓

申し込み受付中!

こころまち つくろう
KEIHAN
京阪電車



宇治橋

おけいはんでゆく

宇治で一服。



月桂冠大倉記念館

伏見で一杯。

宇治・伏見
1day チケット



大人

550円～900円

小児

280円～450円

※乗車駅により異なります。

◎通用期間：発売日当日

◎発売期間：2013年4月14日(日)まで

◎発売場所：京阪線各駅

(大津線各駅・男山ケーブルを除く ※駅係員配置時間内に発売)

宇治・伏見、
水と歴史の、
まちめぐり。

お問い合わせ

京阪電車お客さまセンター

☎06-6945-4560

平日9:00～19:00

土・日曜・祝・休日9:00～17:00

※12/30～1/3は休業

ひと味ちがう、
はんなりです。
京阪電車の京都旅。
京都市街の中心部から
南にひと足で、
茶どころ宇治、酒どころ伏見。
それぞれに歴史と
文化あふれる2つの名所は、
同じ川、水の恵みで
つながっていました。
京都、だけど、ひと味ちがう、
新しい京都旅へ。
でかけませんか、
京阪電車にのって。

※ 詳しくは、ホームページ (www.keihan.net) または
京阪電車主要駅でパンフレットをご覧ください。

A: 蔵屋敷と呼ばれますが、「蔵」だけではありません。

武士がトノサマバツタの前で土下座するCMがある。「トノサマバツタ」という名前ですが、殿様ではありません」というキャッチコピーで、某電子専門学校が電子系だけに特化していないことを謳うのだ。このCMを見るたびに、私の脳内には「蔵屋敷」という名前ですが、蔵だけではありません」のコピーが浮かぶ。

「蔵屋敷」と言えば、本藩の生産物を貯蔵・販売する施設としてのイメージが強い。納められているのは言うまでもなく年貢米が主だが、例えば土佐藩の鯉節、福山藩の畳表、薩摩藩の砂糖、徳島藩の藍玉などの特産品も無視できない。その反面、本藩内で供給できない物資を調達することも蔵屋敷の役目であり、また飢饉時には収納物資を大坂および周

辺の人々の救援のために利用することも期待されていた。

寛永18年（1641）の飢饉に際して、俠客・木津勘助が福岡藩の米蔵（幕府の米蔵とも伝える）を破って難民に配給したという伝承も、こうした機能に対しての不満を踏まえて理解すべきだろう。（高島）

Q: そもそも「蔵」なんですよね？



なるほど、そうだったのか。

蔵屋敷の常識

基礎知識編

江戸時代の中之島には蔵屋敷が建ち並んでいた、というのは誰もが知る話。ところが、この蔵屋敷の機能や性格についてはあまり知られていない。中之島の歴史の始まりと言っても過言ではない蔵屋敷の常識を、二気に「蔵出し」！

Q: 倉庫以外にはどんな役割が？

A: むしろ「大きな蔵のある藩邸」と考えるべきでしょう。

江戸から遠い西南諸藩の藩主にとって、大坂の蔵屋敷は参勤交代の往復時に利用する宿舎としての意味も大きい。となると、この場合はむしろ藩邸が蔵機能を持っていたと言わべきかもしれない。延岡藩（大分県）藩邸などの藩主の滞在にあたって、美味で知られた大阪天満宮の井戸水を運び込む習慣や、佐賀藩蔵屋敷から藩主用と思われる鍋島焼が出土していることなどは、ここが藩主の宿



佐賀藩蔵屋敷跡から出土した陶磁器の一部。これらは藩の特産品でもあり、大坂市中に多数出回っていたようだ。写真提供／大阪文化財研究所

舎であったことをよく表わしている。

また、一旦緩急あれば、藩兵の駐留基地ともなった。特に幕末期の蔵屋敷は慌ただしい。安政元年（1854）にロシアのディアナ号が天保山沖に姿を現したとき、沿岸の防衛にあたる諸藩の蔵屋敷はその役目を担った。元治元年（1864）には長州藩の軍勢が大坂の蔵屋敷を経由して上洛、禁門の変を戦っている。

その後、幕府による長州藩追討に先だって、大坂町奉行所は長州藩の蔵屋敷を打ち壊した。これも蔵屋敷が兵站基地であったことによる。そもそも徳川氏による軍事政権の時代なのだから、藩邸（蔵屋敷）の本質的な機能が軍事施設であったことは当然だろう。（高島）

Q: では、なぜ「蔵屋敷」と呼ばれたの？

A: 大坂が経済都市だったからです。

蔵屋敷の機能は幅広い。諸藩の江戸屋敷が幕府と折衝する大使館だとすれば、京や大坂のそれは領事館のようなものだ。現代の外交官と同じく実には幅広い職責を持っていた。ただ、大坂の場合は、経済都市としての性格に対応するべく大がかりな倉庫機能を備えていたため「蔵屋敷」と呼ばれたのだが、それは大坂藩邸の倉庫機能を象徴するものの、他の機能を廃するものではない。（高島）

A: 諸藩の官僚と商人たちです。

蔵屋敷には藩から赴任する「蔵役人」がおり、その代表責任者を「留守居」と呼んだ。本来、この留守居が蔵物（米と特産物）の管理売却の実務担当者である「蔵元」も兼ねたが、寛文以後、米問屋や両替商などの商人蔵元が一般的に。彼らの多くが士分にとりたてられ扶持米（給料）を支給されたが、蔵物を売却する際

Q: 誰が、どんな仕事を？

に口銭を受け、これを元手に投機的利益を得る者も少なくなかった。

また、藩が受け取るべき蔵物の売却代金を管理するのが「掛屋」で、やはり金融実績がある両替商が任命された。彼らも扶持米を受ける者が多く、預かった売却代金を無利子で管理しながら、知恵才覚で金利を確

町人への委託に移行していったのであろう。一方で、財政的支援を受けるにいたった藩では、掛屋や蔵元に頭が上がらず、福岡藩のように盛んに商人を接待する記録も残っている（『浪速詰方日記』。元はと言えば、

借銀も自藩の蔵物から出たもので、頭を下げて頼むのもナンセンスだが、これこそ、武士の商法」の最たるものと言えよう。（明尾）

中之島三井ビル付近にあった、木津勘助の伝承の舞台である旧黒田藩蔵屋敷長屋門（大阪府有形文化財）が天王寺公園に移築されている。「中之島に再移築すべき」と高島先生。

答えるのはこの人たち。
高島幸次
大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所員。本誌でもおなじみ、大阪の歴史のことならこの人。精緻な研究の成果をユーモアたっぷりの語り口で教えてくれる。

明尾圭造
大阪の商業・産業に特化した史料を有する大阪商業大学商業史博物館の首席学芸員。「大阪日新聞」に江戸期大坂のさまざまな史料を紹介する「浪華紙魚百景」連載中。

**A: 中之島には
100近くありました。**

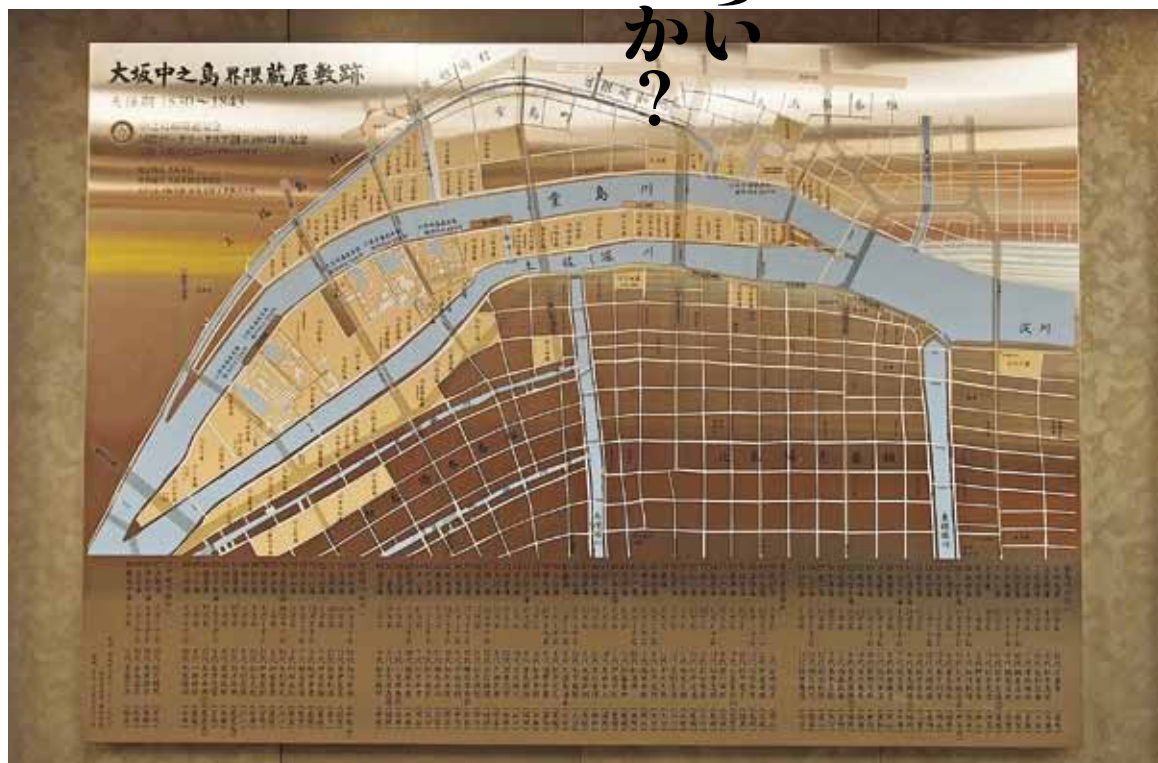
大坂の蔵屋敷は、豊臣政権下の天正期（1573〜92）に設けられた加賀藩蔵屋敷が最初だというが、中之島一帯に蔵屋敷が軒を連ねるのは、元和5年（1619）の大坂城再建普請および翌年の伏見大名屋敷撤去の後である。最盛期には大坂だけで500〜600を下らなかった

**Q: 何軒ぐらい
あったのですか？**

という記録もあるが、これは諸大名以外の蔵屋敷も含めた数字である。天保年間（1830〜44）の諸大名の蔵屋敷は大坂市中に124だった。このうち中之島内外には90を数える（中之島本島11藩、堂島川北岸11藩、土佐堀川南岸11藩、江戸堀川南岸11）。（高島）



京阪電車大江橋駅構内の壁面に設置されている、天保年間の蔵屋敷の様子を表したレリーフ。藩名と石高などが記されているほか、今はどんな建物が建っているのかも記されている。



**Q: どんな
風景だったの
でしょう？**

**A: こんな建物が
建ち並んでいました。**

江戸時代の中之島には、蔵屋敷の「なまこ壁」が連なり、市中でも特異な景観が広がっていた。「なまこ壁」とは、建物を火災や水難から守るために、壁面に平瓦を貼り付け、



これがすなわち「なまこ壁」。今であれば神戸・北野の異人館、京都の祇園の石畳のようなイメージアイコンだったと思うことだろう。写真提供／大阪市都市工学情報センター

**A: 実は日本全国に
ありました。**

蔵屋敷と言えば、「諸大名が大坂に設けた施設」だけを思い浮かべるが、実は宮家・公家、大寺社、高禄の幕臣・藩士なども、年貢米などを売り捌くための施設を、大坂の他に

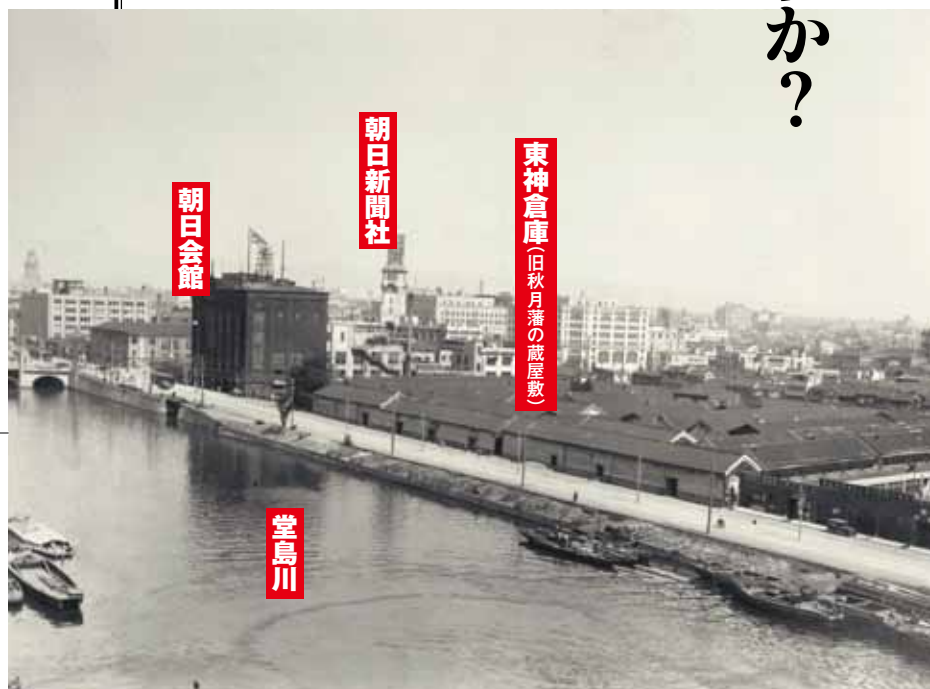
**Q: 大阪だけ
にあったん
ですよ？**

江戸・京都・大津・敦賀・長崎などに置いていた。その活動も単なる物資の保管に止まらず、倉庫証券を発行して貿易交換を行い、保管物資を担保にして資金融通などを行ったりしていたから、近代倉庫業の先駆けと言えなくもない。（高島）

**Q: いつまで
あったのですか？**

**A: 建物はけっこう
最近まであったんです。**

蔵屋敷地の多くは、名代に立てた有力町人から借用の形式をとっていたが、実質は大名の所有であった。そのため明治4年（1871）の廃藩置県を機に、蔵屋敷は大坂府に没収され役目を終えることになった。その後、政府や民間の倉庫に転用されたが、黒田藩・鳥取藩・柳川藩・熊本藩の場合は、大正期に至ってもそのままの形状で民営倉庫として使用されていたという。先に近代倉庫業の先駆けと言ったのは言葉の綾ではない。（高島）



朝日新聞社

東神倉庫（旧秋月藩の蔵屋敷）

朝日会館

堂島川

堂島川沿いの蔵屋敷群。その奥に大正15年（1926）竣工の朝日会館が見えることから、昭和初期と思われる。そう思うと、けっこう最近まで大阪の風景としてあったということになる。写真提供／大阪市都市工学情報センター



「なまこ壁」の名は、盛り上がった漆喰が海の動物「なまこ」を思わせることによる。所蔵／関西大学総合図書館

格子状の目地（継ぎ目）を漆喰で固めた壁をいう。

『新板大坂名所名物廻絵図』は、大坂市中の名所29カ所を絵双六風に描くもので、天王寺から始まり、道頓堀・雑喉場魚市・天満天神社などを経て、浪花錦城（大阪城）で上がりとなる。その各場面にふさわしいモチーフを採り上げているが、「御蔵やしき」の場面は「なまこ壁」だ。船場の大阪町人たちも、土佐堀川の向こうに並んだ「なまこ壁」を眺めて中之島を実感したにちがいない。（高島）



広島藩「芸州大坂御屋敷全図」を見る。

蔵屋敷の内部はなかなかイメージしづらいが、百聞は一見にしかず。内部を詳しく描いた絵図から、その様子を垣間見てみよう。

文／高島幸次



1. 船入の入口にあたる。土佐堀川に面しており、船が出入りができた。ここにかかっているのが船入橋で、大藩の象徴でもあった。



2. 水の中に建つ鳥居の姿はまさに安芸の宮島のそれ。後ろには確かに「嚴嶋社」の文字が書かれている。



3. 米を収める蔵。広島藩屋敷の敷地内には1番から25番までの蔵があった。その他、「御鉄蔵」などがあったことも描かれている。



4. 屋敷の中央部にある書院。表門から入り、玄関を通って着くのはここ。あくまで倉庫機能をふんだんに有した藩邸であることがわかる。



「芸州大坂御屋敷全図」
(佐古慶三教授収集文書・
大阪商業大学商業史博物館所蔵)

広島藩の大坂蔵屋敷は、現在の市立科学館の北側（市立近代美術館建設予定地）に位置し、元和6年（1620）に竣工した。その構造については、「大坂中ノ島御屋敷絵図」（浅野文庫本絵図）と、「芸州大坂御屋敷全図」の2枚の絵図が伝わっており、また発掘調査報告書も出ているので全貌を知ることができる。「大坂中ノ島御屋敷絵図」には南北88間余（約160m）、東西48間（約87m）と記されており、42万石余の大藩にふさわしい敷地だった。

「表玄関」はどこにか？

今回紹介する「芸州大坂御屋敷全図」は、蔵屋敷の内部を描いた図としてはとても情報量が豊かで、現代の我々にとってはありがたい史料だ。その図からどんなことが読み取れるだろうか。

まず図の下の方、敷地の南辺の門に「表

御門」と記されている。その正面に見える「御玄関」から屋敷内に入れば、屋敷の中心部にある「御書院」へと続いていく。ここまで述べてきたように、蔵屋敷とは言え、藩主を迎える藩邸であることが明らかな構造になっている。

敷地内に築かれた「船入」。

その屋敷の西側・北側にオレンジ色で塗られた9棟の「御米蔵」が並ぶ。そして注目されるのは、屋敷北側の堂島川から敷地内に水を引き込む「御船入」だろう（「大坂中ノ島御屋敷絵図」では「内堀」と書かれる）。言うまでもなく、船のままに敷地内に入り、物資の揚げ下ろしをできるようにするための工夫だ。現在、同種の船入は、熊本藩・徳島藩・高松藩・久留米藩・鳥取藩・佐賀藩など10藩程度の大藩の蔵屋敷において確認されている。船入への水路には「船入橋」が架かっていたから（個々には徳島橋・高松橋などと呼ばれた）、堂島川・土佐堀川付近を航行すれば、また川岸を歩き来すれば、船入橋によってそこが船入を持つ大藩の蔵屋敷であることが知れるのであった。

故郷を思う神社もあった。

そして、その船入の北側に鳥居が描かれている。ここが広島藩の蔵屋敷であることを思い出してほしい。そう、これは厳島神社だ。本藩を遠く離れた藩士たちは、船入の南側から水中鳥居を通して参拝しながら、安芸の宮島を思い浮かべたに違いない。

なぜいま「海の大阪」なのか。

水都って、川沿いにおしゃれなカフェがあるだけの都市のことでしょうか？
もちろん水辺の快適な空間は大切ですが、
水都っていうのは生活や産業が海や川と密接につながった都市のこと。
そして大阪はもともと海辺の街として発展してきた都市、
そして実際の大阪は今でもちゃんと海の都市なのです。
水都大阪という言葉が定着してきつつあるなかで、
川だけではない、海の大阪を通して水都の本質に迫ります。

◎今月の講座(テーマ・講師)

第5回 1/16(水) ※講座内容は、月刊島民2月号に掲載予定です。

「近代大阪の港と交通」



大西隆太(阪神電気鉄道)

大阪の近代化・産業化を支えた、
明治以後のダイナミックな港湾建設と、鉄道の敷設。
その関係、栄枯盛衰をたどります。

「船長から見た大阪港と川」



中野弘巳(御舟かもめ)

川と海はどう違う？川を行き来する小型船の船長にとって、
大阪港はとてつもなく大きい海。
船長が海を語ります。

「港的風景をゆく(5) 北加賀屋
—産業化遺産とクリエイティブ・ビレッジ」

山納洋(大阪ガス)

かつて造船と木材の町として栄えた北加賀屋は今、
アーティストやクリエイターが集う
クリエイティブ・ビレッジとして生まれ変わりつつあります。

◎概要

時間／7:00PM~8:30PM

会場／淀屋橋odona2階「アイ・スポット」大阪市中央区今橋4-1-1

受講料／無料

定員／30名(当日先着順)

主催／都市大阪創生研究会ワーキンググループ

協力／ナカノシマ大学事務局

お問い合わせ／☎06-6949-1911(事務局)

◎今後のスケジュール

第6回 2013年2/8(金)

「あなたにも関係ある貿易の今」

「港に住むということ」高見(IAOプランニング&デザイン)

「港的風景をゆく(6) 咲洲—港湾風景の現在形」山納(大阪ガス)

※上記は現在の予定です。日程は変更しますが、内容は、講座の進展によって変更する可能性があります。

連続講座

「海の大阪」

都市大阪創生研究会では昨年度の活動として、大阪と海の間をみつめなおし、
生活や産業のなかでの水都大阪を探検してきました。
あまり認識されていないけど大阪はやっぱり海の街なのです。
だからダイープな海の物語がたくさんあるところがあるのです。
そのなかからとっておきの「海の大阪」を、全6回でお伝えします。
参加費は無料。多数の参加、お待ちしております。

◎平成10年にスタートした都市大阪創生研究会は、行政と民間のパートナーシップによって新しい時代に向けて
都市のリノベーションを実現するため、大阪の未来として入るべき道を考える場として活動を続けています。



寛 政年間のこと、伊勢津藩藤堂家の大坂蔵屋敷留守下役に米屋彦兵衛が採用された。本国回漕の蔵物を最も有効的に売り捌くために力量ある商人を十分に取引立てたかどうか、と考えてのこと。かくして米穀商として実績のあった彦兵衛に白羽の矢が立ったのだった。



趣味人の集う「文化サロン」でもあった。

岡田米山人「高士山水図」(個人蔵)

藤堂藩での仕事を終えた後、米山人の画業はますます進み、人物山水ともに特異な境地に達した。本図は、米山人作品の中でも屈指の密画山水であり、その大きさ、書き込みともに申し分のない大作である。山深い麓に高士の姿が確認できるが、画中の彼らになりきって、しばし雲中の高山に文人精神の境地を愉しみたいものだ。

寛政2年(1790)の『浪華郷友録』には「聞人」と「画家」の項目で紹介される有名人であった。聞人とは文人でもあり、世に聞こえた人という意味もあったろう。
現在、岡田米山人は近世大坂を代表する文人画家として有名だが、やはり酒造家の木村兼霞堂と共に生業をもった大坂文人の代表格でもあった。博物学者で知られた兼霞堂は、各藩特産物の紹介幹旋(兼霞堂日記)にも尽力するところがあったとも思われ、文人画家としても知られた米山人とともに大坂の蔵屋敷は思わぬ人々が交錯する文化サロンでもあった。(明尾)

ぜんぜん知らなかった！

蔵屋敷の「not常識」。

江 戸時代のほとんどの住居には神棚が設けられていたが、蔵屋敷も例外ではなかった。異なるのは、住居内の神棚にとどまらず、敷地内に神さまを祀る立派な建物を建てている例が少なくないことだ。

清正であるが、今も熊本城内に鎮座する「加藤神社」が本社である。このように、大坂市中で最も多様な神格が集まったのが中之島だった。その神祠では、本社と同様に祭日があり、一般の町人も参拝を許されたという。街路には露天商が並び、花火を打ち上げることもあり、市中の祭礼と変わらないにぎわいがあったらしい。明治初年の蔵屋敷廃止に伴い、それらは本社に遷されるか、廃社になるか、



左／高松藩屋敷の神社に始まった朝日稲荷大明神は、竣工したばかりの中之島フェスティバルタワーに遷座。素晴らしい伝統。 右／中之島センタービル内の植込みの奥にたたずむ玉吉稲荷。

あるいは市中に残された。
例えば、先の金刀比羅宮は露天神社(お初天神)の境内社として今も祀られている。朝日新聞ビル屋上にあった朝日稲荷大明神はもと宇和島藩蔵屋敷に祀られていた和霊社だった。大阪市立中央図書館の西隣の土佐稲荷神社は土佐藩蔵屋敷の屋敷神、中之島センタービルの庭内にある玉吉稲荷は小倉藩蔵屋敷の屋敷神だったという具合だ。これらの他にもいまだ知られていない元蔵屋敷の屋敷神がひっそりと祀られている可能性は高い。いつそのこと島民ファンで捜索隊を募ってみようかしらん。(高島)

12 / 26 第4回講座をふり返って

水のなかから
生まれた大阪。

「水の都おおさか」は、水に開かれ、水のなかから生まれたといってもよい。琵琶湖をはじめとする北近畿地域の水が、大阪湾に流れ出る、水が溢れるばかりのまさにその場所に大阪が生まれた。堤を造り水の流れを制御し、堀を掘り水を吐き出し、そうして生まれた土地に大阪の町が造られた。

大きな河川の下流部では、上流から運ばれた土砂が堆積し、浅瀬や洲をつくっていく。こうして埋まってしまった港も各地にみられる。大阪ではこうした川の堆積作用を逆手にとって埋め立て地が造成された。



臨海部埋立の系譜(玉置豊次郎「大阪建設史夜話」大阪都市協会、1980年作成)

現在の大阪市域の
25%が埋立地。

本格的な埋め立ては、17世紀のはじめに新田開発という形ではじまった。埋め立てはその後250年かけて行われ、現在の大阪市域の25パーセントを占めるまでになったのである。埋め立てられた新田は、明治になって土地会社の所有する土地となり、この土地会社によって都市化が行われた。

秀吉が開発に着手した大阪は、徳川の手によってさらに整備が進められた。江戸時代の初めの頃の大阪の海辺はどのような状況であったのだろうか。それを知る資料がこれまでなかったが、旧篠山藩青山家の資料が発見され、こ

れによって可能になった。

河村瑞賢の
安治川開削。

大阪にとって水の流れの制御、つまり治水が大きな課題であった。大和川の付替えがその一番の事業といえよう。

そうした治水事業のなかで、河村瑞賢の安治川開削はよく知られている。この事業は、20日間ほどで完成したという超スピードの事業であった。

大阪の漁村と
海辺の漁業。

水の溢れる大阪、そこでは釣りや漁業が盛んであったに違いない。

水辺の豊富な環境から考えると釣りは良く行われたと思われるのだが、江戸に比べてみると、絵図に描かれたものや随筆に書かれたものが意外に少ない。釣りが文化として定着していないのである。

江戸時代に漁業を行っていた村としては、佃村、大和田村、大野村、福村、野田村、九條村、難波村があった。佃村は江戸の佃の生まれ故郷であり、そ



鳴海邦碩
(大阪大学名誉教授)

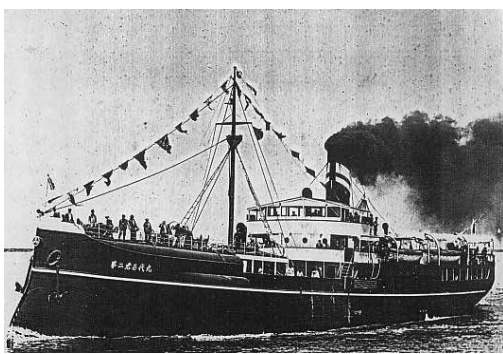
の名をご存知の人も多いと思う。新田の開発地では、地先に葭を植え付け根杭を打ち、土砂を堆積させて海を浅くして行く方法がとられた。この地先の葭の根や杭の付近は、魚の陰れ場所となり恰好の好漁場であった。この地域の漁法を描いた絵巻(右図)が、明治16年(1883)に開催された第1回水産博覧会に出展されている。

12 / 26 第4回講座をふり返って

うどん粉ではなく、
「メリケン粉」。

戦後すぐ、日本中が飢えていた頃、緊急援助物資としてアメリカから小麦が輸入された。人道的援助の機会を利用し、日本人にパンの味を覚えさせ、将来の食料輸出に繋げるというアメリカのしたたかな戦略である。

それまでも稲の裏作として小麦はつくられ、うどんなどの麺が食べられていた。それは国内小麦がうどんに適した中力粉であったからである。しかし輸入小麦はグルテン質が多い強力粉で



大阪と済州島を結んでいた貨客船「第二君が代丸」(Wikipediaより)。

お好み焼きは港が作った？

松塚充弘
(関西電力)

あり、つるつるしたうどんを作ることではない。小麦粉(うどん粉)であるが、うどんに適さないのである。輸入小麦をメリケン粉と言うのは、アメリカ人の発音するアメリカンを模したからだが、そこには大いなる違和感も表現されているのだ。

しかしこんなメリケン粉でも、他の材料と混ぜて作るお好み焼きなら、工夫次第でおいしくできる。山芋などを入れ、粉自体の基本的な特性を変えることさえ可能なのである。

港湾が作った韓国と
大阪の深い関係。

かつて、大正11年(1922)から昭和20年(1945)まで、大阪と済州島には定期航路があった。すでに下関と釜山を結ぶ航路もあり、結果、多くの韓国の人々が大阪へやって来る。現在、在日韓国・朝鮮人の数は、大阪府が12万人超と、国内でトップ。人口の1%を軽く超えており、大阪は最も韓国に開かれた港湾都市であることがわかる。

政治的なアレコレもあったであろう。しかし庶民は飢えの中、今あるものを美味しく食べるため、韓国の文化を柔



大阪・鶴橋
こちらはすっかりコリアンタウンとして有名になった鶴橋。キムチを売る店の店先にもチヂミがある。



韓国・ソウル
広蔵市場(カンザンシジャン)の屋台のピンドトック。おばちゃんの左に緑豆を挽く石臼、右に混ぜた種。

軟に受け入れたと考えたい。「おいしかったらエエやん」は、太古から延々と続く大阪の遺伝子である。チヂミなどの韓国の粉食の知識が、大阪の粉もの素地の一つとなったと考えることは、むしろ普通であろう。

チヂミはいか焼きに。
お好み焼きは？

阪神名物であり大阪名物である「いか焼き」。その味は絶品！というよりはシンプルなもの。しかし時々たまらなく食べたくなる。いか焼きとチヂミに共通するのは、もっちりした食

感と味のシンプル感。偶然に似たと考えるより、共通の遺伝子を持つ異母兄弟と考える方が腑に落ちるではないか。それでは、お好み焼きは何の兄弟なのだろうか。チヂミとは違い、山芋を入れてふんわりサクサクさせる食感は一切どこから……漠然とした疑問を抱えながら過日、ソウルの露店を訪れた。そこで食べた緑豆から作ったお好み焼き「ピンドトック」。貧者の餅という意味に反し、その食感、ふんわりサクサク。まさにお好み焼きの持つ、あの豊かな食感であった。港湾都市大阪、万歳！



ナカノシマ大学
NAKANOSHIMA UNIVERSITY

21世紀の
懐徳堂
プロジェクト



ライバル誌の編集長同士という間柄ではあったが、実は長年の友人でもある3人。3人で編集・執筆した『大阪人』増刊「ちゃんとした大阪うまいもの店」は、雑誌が売れないと言われる中、早々に完売を記録。

江弘毅、待望の新作。

『飲み食い世界一の大阪
～そして神戸。なににあなたは
京都へゆく～』
(1,680円／ミシマ社)

単なる店情報やグルメの
分析ではなく、店で飲み食べ
ることの楽しさ・難しさを、街
で過ごす者としてのリアルで
まっとうな視点で語る。ウェブ
での連載に加え、この本だけ
で読める人類学者・中沢新
一氏との対談も収録。



会場はレトロフューチャーな
インテリアで有名なあの店！

今回の会場は、大阪駅前第1ビル地下1階の喫茶
&バー「キング・オブ・キングス」。懐かしいようでいて未
来的な感覚もたつぷりの内装で、レトロ喫茶好きには
おなじみの名店。1ドリンク＆フード付きのスペシャル
サービス。

は、どんな店を「ちゃんとしている」と
捉え、伝えてきたのか？ うまいもん好
きも活字好きも、メディア関係者も出版
業界志望の学生諸君も必見だ！

街を、店を
どう書くのか？

◎今月の授業

【街とメディア】

2013年2月講座

「ちゃんとした店ってなんや？会議」

講師／江 弘毅 (本誌編集発行人・元『Meets Regional』編集長)

吉村 司 (編集者・元『Hanako WEST』編集長)

石原 卓 (クエストルーム代表・元『関西びあ』編集長)

「ちゃんとした店」とは何か？

店も情報も飽和状態の今、街で過ごす面白さ・しんどさを、
関西雑誌メディアの開拓者たちに聞く。

街で飲んだり食べたりしたい時、ネッ
トや雑誌で店を探すのは当たり前。だが、
店もメディアも膨大に数が増えた今や、
最新情報を追いかけるのはちょっと
食傷気味。考えてみれば、何かを見て消
費情報を得るという行為も、ついここ
30年ほどの間に生まれてきたものだ。

そんな中、昨年末に発売された本誌編
集発行人・江弘毅の最新刊『飲み食い世
界一の大阪～そして神戸。なににあなた
は京都へゆく～』(ミシマ社)は、こ
れまでの著作とも、長く編集長を務めた
『Meets Regional』とも全く異なる作風。
身体性溢れる文体には、今まさに街にい
るかのようなライブ感がたっぷり。また、

「おでんにちくわぶなんか要らん」「京都
のハモの何が旨いねん？」など、ツイッ
ターで炎上したテーマをはじめ、街を見
つめ続けてきた著者ならではの視点も。

今回のナカノシマ大学は、新境地とも
言える本を出版した江弘毅と、その『盟
友』である元『Hanako WEST』編集長の
吉村司氏、元『関西びあ』編集長の石
原卓氏の2人をお招きして、「ちゃん
とした店とは？」について語っていただく。
関西の雑誌メディアを築き上げた3人は、
ライバルであると同時に、思想や視点に
は共通する部分も多いとのこと。雑誌編
集長から次のステージへと進んだが、そ
れぞれのやり方で街と関わり続ける3人

募集要項	「ちゃんとした店ってなんや？会議」 日時／2013年2月21日(木) 7:00PM～8:30PM頃(開場6:30PM～) 会場／キング・オブ・キングス 受講料／2,000円(1ドリンク+1フード付き) 定員／80名 主催／ナカノシマ大学事務局 協力／ミシマ社	お名前・ご住所・電話番号を明記の上、下記までハガキ、ファックス、もしくはHP内の応募フォームからお申し込みください。ハガキ、ファックスについては、複数名でご参加希望の場合は、人数分の必要事項を明記してください。ハガキ、ファックスでお申し込みの方は、講座名を必ずお書き添え下さい。 〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階 「ナカノシマ大学2月講座」受付係 FAX.06-4799-1341 ※先着順で受付を確認し次第、順次、受講票をお送りします。 ※定員に達した時点で申し込みは締め切らせていただきます。

ナカノシマ大学の最新情報は

<http://www.nakanoshima-univ.com>

ケータイからは
こちら！→



お問い合わせ ☎06-4799-1340
(ナカノシマ大学事務局)

都市大阪創生研究会×ナカノシマ大学 SPECIAL



伝法川の跡は石碑として残る。

大正6年(1917)9月の大坂朝
日新聞に、こんな記事が出ている。
「昔船の出入を安治川に奪われた伝
法川は、今や
安治川へ往來
する無数の船
で大賑いだ。
それは尼崎や
神崎川の沿線

漁港としての伝法の歴史。

伝法5丁目には、ワインボトルの形
をした船だまりがある。栓の部分には
新淀川に接する開門があり、ボトルの
中には漁船や作業船、プレジャーボ
トがひしめき合うように浮かんでいる。
一角には大阪市漁協の此花支部が置か
れ、シラス、イカナゴ、スズキ、ボラ、
アジ、シジミなど、汽水域に生息する
魚介類を水揚げしている。すぐ近く
に「克政」というふぐ料理屋があり、
日本海の低温で育った良質の若狭産ト
ラフグや、国産のハモを扱っている。
しかしながら、伝法はかつては物流
港として栄えていた地である。ボトル
の底の部分はかつて、伝法川、正連寺
川、六軒家川、そして安治川と繋がっ
ていた。



かつての面影は少ない伝法漁港。

に、素晴らしく工業の興った為其処へ
供給する物資は、安治川を下って築港
沖を遠廻りするの不便を避け、伝法川
へ抜け其処の開門を通って、新淀川へ
出ると言う近道を執るからである。」
小は肥舟から大は石炭船まで、毎日
500～600艘が行き交ったという。
淀川河口のデルタ地帯にあった伝法
の地は、早くから漁村として開け、ま
た仏典が初めて伝えられた地として知

界隈の風景を大きく変えたのは、新
淀川開削である。明治18年(1885)
の淀川大洪水を期に淀川改修が進めら
れたが、新川開削により、北伝法村に
あった申村は、その9割が川底に沈ん
でいる。家屋敷や田畑を買い上げられ
た人々の多くは村を離れた。
明治42年(1909)に申村で生ま
れた勝安男氏は、両親や祖父母から聞
いた話をまとめた著書『伝法のかたり

新淀川の開削によつて
大きく変わった風景。



べ」の中で、その様子を「長年住み慣
れた申村から出て行く者の後ろ姿は余
りにも哀れに見え、とめどなく流れ出
る涙で見るに忍びなかった」と伝えて
いる。地元産業であった酒造業、油絞
め稼業もほとんどが廃業し、伝法港の
廻船問屋も廃れていった。
その後、昭和31年(1956)に伝
法川は埋め立てられ、ワインボトルの
船だまりだけが残されている。物流港
としての殷賑は今はなく、漁港として
の落ち着いた佇まいを見せている。

12 / 26 第4回講座をふり返って

港的風景をゆく(4) 伝法(大阪市此花区)——消失景としての港(山納洋
大阪ガス)

リ
ーガロイヤルホテルへの道すがら、モデルルームの白壁の向こうに、不思議な形をしたオブジェを見た。壁の説明書きには「慈雲尊者誕生碑」。鉄格子越しに見れば、傍らの石碑にも「慈雲尊者生誕之地」と刻まれている。

実はこの碑、昨年11月末に設置され



後藤さんは、北浜に店をかまえる老舗魚すき店「丸萬本家」の9代目にして、現代美術作家としても活躍中。クリスタ長堀のレリーフや琵琶湖記念公園のオブジェなど、関西のランドマークを多く生み出している。

知られざる高僧の 顕彰碑ができていた。

たばかり。中之島が生んだ偉人である慈雲尊者がほとんど知られることなく、開発が進む中で埋もれてしまうと、顕彰会によって建立された。京阪電車中之島線開発の際も、この地は避けて工事を行ったそう。そこまでは敬われる慈雲尊者とは、いかなる人物なのだろうか。



慈雲は享保3年（1718）、中之島の高松藩蔵屋敷で生まれた。真言宗派の法樂寺にて出家した後、精力のすべてを学術に注ぎこむ。仏教だけでなく、儒学や神道など分け隔てなく学んでいたが、特に打ち込ん

でいたのがサンスクリット（梵語）の研究。日本では近代になってようやく注目されたところを、すでに18世紀には理解し、書を残すまでになっていた。あらゆる学問を修めた慈雲は、やがていくつも分かれた宗派仏教のあり方に疑問を持つように。そこで重視したのが戒律だった。それも釈迦の時代の戒律を唱え、規範を統一して本来の寺や僧のあり方に原点回帰しようと働きかけた。まとうべき袈裟のありようを

知するため、服飾の研究までしたのだから、その知識欲は生半可ではない。雲という僧の人物像を、いかに「慈」としてこむかが課題でした」と、特別に碑の近くまで案内してくれたのは、デザイン制作を手がけた後藤英之さん。自身が慈雲ゆかりの法樂寺の檀家であることから、その名を聞いたことはあったという。慈雲のイメージをつかむため、その生涯を丹念に調べ、富田林にある寺まで墓参りを

したことも。そして生まれたデザインは、慈雲が著した『十善法語』を思わせる十層に積んだ石柱に、印を結ぶ手の形を組み合わせたもの。さらに、能書家でもあった慈雲の書『道在近』を彫り込んだ。「この道」と名付けられた碑は、人のあるべき道を示した慈雲をよく表している。

後世には「小釈迦」とも呼ばれた慈雲だが、今やほとんど知る人はいないだろう。その顕彰碑ができたと聞いて、ナカノシマ大学でもおなじみの釈徹宗先生も感動しておられた。

「福沢諭吉と並ぶ中之島の偉人である慈雲の碑ができたのは、今の時代にとっても結構なことですね。彼の本当にすごいところは、専門学的に戒律を説きつつ、それを日常に反映して生活してみようと提案したところ。蔵屋敷で生まれて徳を積んだこともあって、町民にも尊敬されていたんです。『右手にそろばん、左手に十善法語』という言葉もあり、お金を扱うなら日常の倫理をおろそかにするなと、その心がけは大坂商人たちの目指すところだったんです」

碑にも刻まれた「道在近」（『道は近きにあり』）という言葉は、身近な日常の中にこそ、より良く生きる道があることを意味する。大坂町人たちの間で根づいていた精神が、よみがえった。

かもめ船長の 水辺航海日誌 二月〇日

川の冬景色。

中之島のユリカモメ。



何度見ても、ユリカモメは水辺に映える鳥だと思ふ。船長業をはじめて4年、都心の水辺暮らしは10年ほどになるので、冬の景色といえば彼らの姿が思い浮かぶ。時折、難波橋の石塔のてっぺんで羽を休める姿を見かけるが、「水兵さん」に例えたあの童謡は上手いこと言ったもので、中之島を見下ろす姿は何か誇らしげでもある。あるいは、越冬のために北の大陸から渡ってくるのだから、バカンスに訪れた南の国を感慨深く眺めているのかもしれない。

寒さへの小さな抵抗。

そんなカモメたちを眺めながら、船上の私は肩をすぼめる。残念ながら冬の寒さはどうしようも

ない。それでも海外など遠方からの方など、少なからずお客様が乗船して下さる。ウッドデッキにはコタツを置き、電気ケトルでお茶やコーヒーを入れ、ひざ掛けを用意して、非力ながらもアレコレと寒さに抗おうと工夫をしている。電気式の鍋を試しに貸し出してみたこともある。船上でのおでんは準備も手軽で上々だったようだ（船には揺れがあるのでダシの量には要注意！）。ぜんざいを魔法瓶に入れて船上で食べたこともある（これは自分用）。餅の上に小豆が熱を蓄えていて身体を温めてくれた。



ちなみに、船上では火気が使にくいので電力が必要になるのだが、これがけっこう厄介な問題だったりする。どこから電線を引っ張るわけにもいかないで自前で発電をするのだけれど、発電機には容量があり、負担をかければ騒音も出る。燃料も食う（当然、小売してくれるガソリンスタンドに船は着けられない）。都心にいっても一度インフラから切り離されると、色々やこしくなるんだなあと感じさせられる。

冬の眺め。

真冬は日中でも太陽の高度が低いので、横からの日差しが街に届く。モデルさながら正面から照らされたビルや橋、高架道路がいい味を出してくれる。水辺のマンションの4階にある我が家では、この時期になると日差しを反射した水面の揺らめきが部屋の奥まで入り込んでくる。水上には冬鳥が浮かんでいる。先ほど紹介したユリカモメやマガモたちを追ったり追われたりしながら進むのもなかなか楽しい。

ところで、雨の少ない秋から春先までは「渇水期」で、一般に水量が少ないことから河川工事に向く季節とされる。中之島界隈の水量差はほとんどないものの、工事関係の船の往来は目立ってくるので、働く川、働く船の眺めがお好みの方には、そういう楽しみ方もあるかもしれない。



中野弘巳
なかのひろみ
中之島をはじめ、大阪の水辺をクルーズする小さな遊覧船「御舟かもめ」船長。
<http://www.ofune-camome.net/>

トウニン月報

2013年1月1日発行



公式HP「チャレンジおけいはん」<http://www.challenge-okeihan.net>には、詳しいプロフィールなども掲載。TwitterやFacebookでは、本人が綴る日々をのぞくことができる。

チャレンジしていく予定だ。
この新シリーズでは一般の人々も参加できるイベントも広く展開していくそう。
おけいはん1年生がすすめる中之島指南書として、『月刊島民』とのコラボレーションも願わずにはられない。(江口由夏・本誌)

毎年秋の恒例行事となりつつある、関西・大阪21世紀協会による「アート・アセンブリ2012」が、昨年11月12日、クラブ関西にて開催された。この取組は、音楽や演芸、伝統芸能などの分野において、関西を拠点として活動する優れたアーティストの発表の舞台をつくるためのもの。また、経済界やマスコミ関係者たちとの出会いの場を提供すること、新たな活動の場を広げる後押しをする。

今年秋の恒例行事となりつつある、関西・大阪21世紀協会による「アート・アセンブリ2012」が、昨年11月12日、クラブ関西にて開催された。この取組は、音楽や演芸、伝統芸能などの分野において、関西を拠点として活動する優れたアーティストの発表の舞台をつくるためのもの。また、経済界やマスコミ関係者たちとの出会いの場を提供すること、新たな活動の場を広げる後押しをする。

主筆バレー団は「くるみ割り人形」を、豊竹咲甫大夫さんは文楽素浄瑠璃「ひらかな盛衰記 逆櫓の段」を披露。そして会場を驚かせたのは、この日のためのスペシャルプログラムである文楽とバレーのコラボレーション作品「大蛇退治」。文楽の語りに合わせてバレーのダンサーたちが踊るという今まで見たことのない斬新な組み合わせに、参加者からは大きな拍手が贈られた。
続いて行われた交流会では、アーティストと参加者たちが自由に語り合い、親交を深めた。(大迫力・本誌)

5代目おけいはんは「中之島はるち」。

京阪電車のキャンペーンキャラクター「おけいはん」。キャンペーンが始まった2000年より、代々のおけいはんたちはCMに広告、ポスターと活躍し続けている。

そんな超有名イメージキャラクターも、いよいよ5代目へ代替わり。これまでは女優やモデルが務めていたところを「もっと親しみやすく、愛着を持ってもらえるように」と、新しい試みとして一般か

らのエンタリーを募った。

そして約1800人の中から選ばれたシンデレラガールが、大阪府出身の大学1年生、畦田ひとみさん。新シリーズテーマ「チャレンジ」のイメージと、のびしろを感じさせてくれる畦田さんの雰囲気、がびったりだったことから白羽の矢が立った。畦田さんは、同じく成長が期待される中之島の名を取った「中之島けい子」として、様々な催しにチ



右／旧大阪市立博物館の特別公開は目玉企画の一つ。左／「上町台地オープンフェスタ」にはゆるキャラも登場。

オープン台地 in OSAKA

ナカノシマ大学1月講座「上町台地の神社仏閣を語る」は、いつもの中之島から一歩進んで、大阪の真ん中を背骨のように走る上町台地がテーマに。会場は生國魂神社、出演者も、祝賀宗と高島幸次の『大阪の神さん仏さん』コンビに加え、て四天王寺と生國魂神社の方も登場するなど、まさに上町台地づくしだ。

実は今回の講座は、「オープン台地 in OSAKA Vol.3」とのコラボレーションによって行われている。このイベントは、その名の通り上町台地にある神社仏閣や建物、お店などを開いて、たくさんの人たちをお迎えしようというもの。街の人たちが一体となって、歩きや自転車、ツアール、ワークショップ、発表会など40もの多彩なプログラムが行われる。昨年までは短期間だったが、今年からは

なんと23日間と二気に充実する。ナカノシマ大学はもちろんのこと、その他にも気になるものがきつとあるはずだ。ホームページでは各プログラムの詳しい内容が紹介されているので、そちらを見てぜひお出かけを。(大迫力・本誌)

ナカノシマ大学も開催！オープン台地『始まる』

『月刊島民』でも総力を上げて特集した中之島フェスティバルタワーが、めでたく昨年11月28日(水)にオープンを迎えた。注目したいのは、一般の人々が入りやすい商業ゾーン。地下1階〜地上2階、37階の「フェスティバルプラザ」と、12階〜13階に分かれて飲食・物販全32店舗が一室に会する、なんとも華やかなエリアだ。さっそく開業初日に行ってみることにした。

開業したての中之島フェスティバルタワー。



中之島フェスティバルタワー <http://www.festivaltower.jp>

正面玄関すぐの赤いカーペットが印象的な大階段の下では、就任したばかりの新おけいはん、中之島けい子さんも出席し、オープンセレモニーのテープカットが行われた。その大階段を上りきった9階では、佐渡裕から氷川きよしまで、フェスティバルホールらしきさまざまな音楽ジャンルの有名アーティストによる、4月のフェスティバルホール

オープンへの期待を込めた直筆メッセージパネルがずらり。

ホール入口の反対側には、和・洋・中の高級感のある飲食店が並ぶ。ホールが開業すれば、公演のあとにお食事といったコースが叶いそう。

街をイメージした華やかな地下1階。

天井が吹き抜けになっている地下1階の「サンクンガーデン」には、目の光だけではない明るさがあった。ほとんどの店がガラス張り、店内がよく見える。まるで商店街のような雰囲気、買い物やアフターファイブの一杯に立ち寄りやすい。ラインアップも、グローサリーからパルパに雑貨屋と、1つの街のようにバラエティ豊か。お土

産ひとつ選ぶだけでも楽しい時間を過ごすことができる。

駅直結フロアは働く島民の強い味方。

京阪電車渡辺橋駅構内から続くエリアは、通路を挟んだ両サイドに飲食店が並ぶ活気ある地下街が広がる。嬉しいのは、オフィス街の真ん中にしてお昼休みのある店がないこと。夜はお酒が楽しめること、夜はこれまでに気軽に立ち寄れる店が少なかった中之島にとっては、とてもありがたい場所になりそう。朝・昼・夜とそれぞれに違う使い方ができそう、ぜひとも行きつけの1軒を見つけてみてほしい。(江口由夏・本誌)

37F
地上200mを誇る最上階にあるのは「ラ・フェット ひらまつ」。中之島からのパノラマ風景は、料理とともに味わうことでいっそうとてもおき感が増す。



13F
フェスティバルタワーを支えるメガトラスを間近で見られるスカイロビー。5月にはカフェ[Ciao]がオープン予定。コーヒーで一息つける憩いの場になること間違いなし。



12F
タワー内の企業だけでなく一般の人も歓迎してくれるリーズナブルなカフェテリア「フェスティバルキッチン」は、夜10時頃まで営業しているとのこと。



2F
前回もご紹介した「レストランアラスカ」ほか、お洒落をして訪れたい特別感のあるたざまい。その他、わいわいビールを楽しめそうな「フェスティバル&ビアホール」といったお店も。



1F
自転車のある豊かなライフスタイルを提案する「OVE」で、店内書架に「大阪の神さん仏さん」を発見！厳選されたインポート文房具の「デルフォニックス」は、ゆったりした空間で見ているだけでも楽しい。



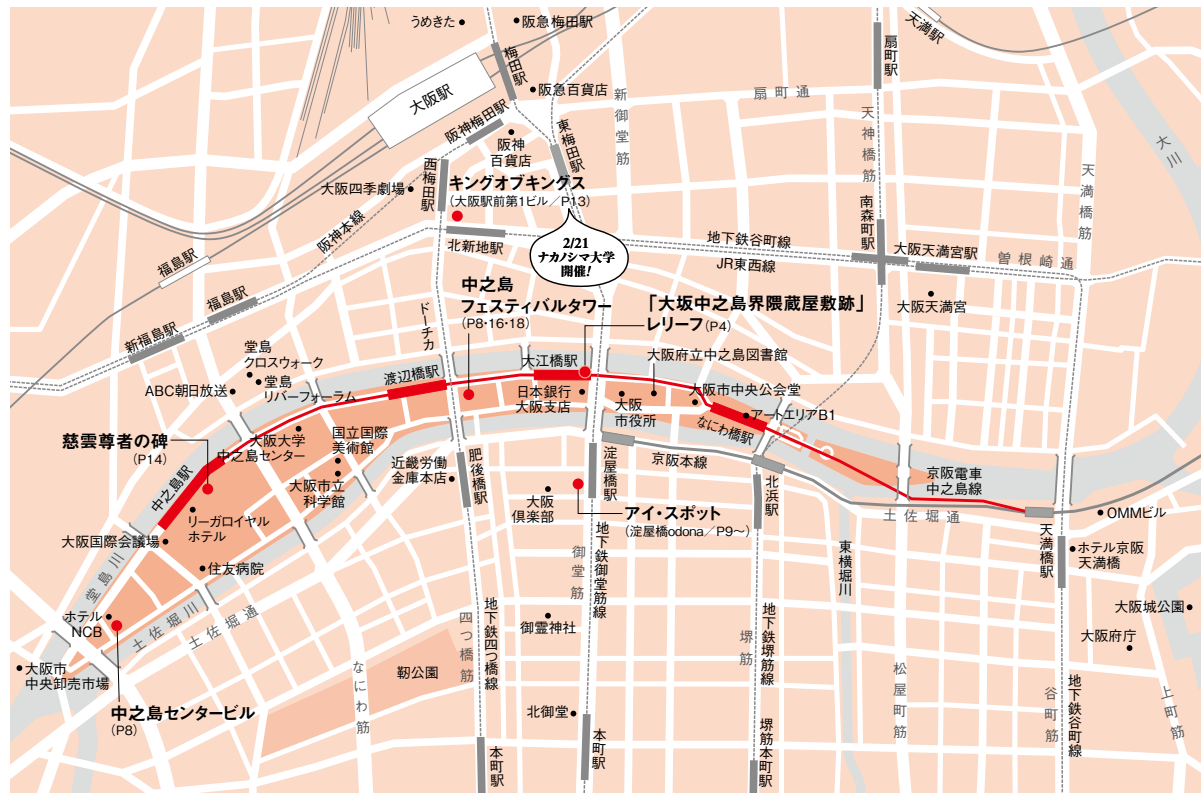
B1F サンクンガーデン
コーヒー豆の品ぞろえが自慢のグローサリー「ジュピター」には試飲の行列ができていた。帝塚山マダム御用達「ポアール・テアトル」の、タワーが描かれたパッケージ入りプチシュークリームなどの限定品は、島外のお得意様へのおもたせに重宝しそう。



B1F 地下街エリア
関西初出店の洋食「キッチンジロー」ほか、クックサービスの飲食店が忙しい島民たちの支持を得そう。中之島と名のつくメニューが多いのが気になる「旬魚旬菜 遊遊」、昼はセルフうどん、夜は居酒屋に早変わりする「千万喜」など、昼も夜も使い勝手万全のフロアだ。

大「島民」MAP

橋を渡って通う人、川を見ながら帰る人、
みんな「島民」です！



『月刊島民』はここでもらえます。

●京阪電車関連 京阪電車主要駅／京阪シティモール／京阪モール／テリスタ天満橋店／ホテル京阪天満橋／ホテル京阪京橋
●大阪市北区・中央区・福島区 〔書店〕旭屋書店 梅田地下街店／旭屋書店 堂島地下街店／カペラ書店／紀伊国屋書店 本町店／ジュンク堂書店 大阪本店／ジュンク堂書店 梅田ビルトンプラザ店／ジュンク堂書店 天満橋店／MARUZEN&ジュンク堂書店 梅田店／スタンダードブックストア／天牛坂書店 大江橋店／ブックファースト 梅田店／ブックファースト 淀屋橋店／文芸堂書店 淀屋橋店／隆祥館書店
〔公共施設・大学関連施設など〕アイスポット／朝日カルチャーセンター／味の素 食のライブラリー／ABC朝日放送／大阪企業家ミュージアム／大阪倶楽部／大阪工業技術専門学校／大阪国際会議場／大阪市中央公会堂／大阪市立中央図書館／大阪市役所市民情報プラザ／大阪城天守閣／大阪商工会議所／大阪大学中之島センター／大阪21世紀協会／大阪府立中之島図書館／大阪フィルハーモニー会館／大阪ボランテア協会／大阪歴史博物館／追手門学院 大阪城スクエア／関西学院大学 大阪梅田キャンパス／慶應大阪リバーサイドキャンパス／国立国際美術館／CITY NAIL'Sインターナショナルスクール／芝川ビル／市立住い情報センター／中央電気倶楽部／ホテルNCB／メック屋町／立命館大阪オフィス／龍谷大学大阪梅田キャンパス
〔店舗・医院など〕アリアスカ マーブルトレ／アンドール 本町本店／上町貸自転車／Ultra 2nd／江戸前鰻料理 志津可／天満橋鍼灸整骨院／MJB珈琲店／大西洋服店／000(オー)／カセッタ／喫茶センター／喫茶SAWA／グランドスイート中之島／黒門さかえ／モモンカ／サウ花店 中之島本店／ザ・メロディ／じろう亭／Girond's JR／心斎橋山田兄弟歯科／住友病院／セブンイレブン大阪証券取引所店／タビエスタイル／ティ・ハウスムジカ／たまがわ鍼灸整骨院／東郷歯科医院／NAKAGAWA1948 淀屋橋店／ナンジャ／バスターレー／花かつ／BAR THE TIME 天神／平岡珈琲店／ビルニアカフェ／フレイムハウス／ミニジロー／宮崎歯科／やきとり ばかや／吉田理容所／ラッカーニャ／LES LESTON
●大阪市内その他 〔書店〕伊勢屋書店／大阪書店／紀伊国屋書店 京橋店／なんばミヤタ／福島書店／柳々堂／ループル書店 〔公共施設・大学関連施設など〕大阪市社会福祉研修・情報センター／大阪市立図書館／川口基督教会 〔店舗・医院など〕あじさい／アートアンドクラフト／欧風食堂 ミリバール／大阪市信用金庫 江戸堀支店／御舟かもめ／Cale Bookshop and cafe／写真とプリント社／鳥かごキッチン／ネイルサロン スワナ／バルビコ／ホステル64オオサカ／MANGUEIRA／Loop A
●大阪府下 旭屋書店 京阪守口店／学運堂 フレスト店／Books 呼文堂／水嶋書房 くずはモール店／水嶋書房 くずは駅店／大阪狭山市立図書館／大阪大学企画広報・学芸連携事務局／大阪大学 21世紀懐徳堂／大阪大学本部／寝屋川市役所／摂南大学 地域連携センター／郵政考古学会／ゆったりん
●大阪府以外 ジュンク堂書店 西宮店／水嶋書房 丹波橋店／伊丹市文化振興財団／大手通リストリットギャラリー 街・発信／納屋工房／タバーン・シン普森／百練／奈良県立図書館情報館

◎バックナンバーお譲りします。

バックナンバーをご希望の方には1冊100円(手数料)でお譲りしています。なお、品切れの号もありますが、予めご了承ください。お問い合わせは下記の電話番号まで。

◎定期購読も受け付け中です。

毎月確実に読みたい方は、ぜひお申し込みください。まずは下記の電話番号までお問い合わせ下さい。

次号予告 唄ってください、中之島

川の流れて捨てた恋。雨に降られた御堂筋。今日も水辺に灯がともる。
唄ってください、あの歌を。昭和の歌が映し出す、シマとあなたの人生劇場。

●『月刊島民』vol.55は2013年2月1日発行です！

編集・発行人／江 弘毅(編集集団140B)
編集・発行／月刊島民プレス
若狭健作 網本武雄(株式会社 地域環境計画研究所)
松本 創 大迫 力(編集集団140B)
〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階
Tel 06-4799-1340 Fax 06-4799-1341
制作進行／堀西 賢(ALEGRESOL)
デザイン／山崎慎太郎
表紙イラスト／奈路道程
印刷／佐川印刷株式会社

祝祭に包まれて

—わたしのフェスティバルホール—

取材・文／松本 創(本誌)

「いよいよだ、という熱気で満ちてました。僕は舞台上でスポットを浴びてお客さんの顔は見えないんだけど、フェスティバルホールは客席が近くて一体感が強いから。エアロミスといえど当時人気絶頂、ビッグを通り越してメガバンド。その初来日でしたから」昭和52年(1977)2月。山崎敏一さんは、フェスティバルホールを埋めたロック・キッズの前に立った。アメリカからバンドを招いた「ウード音楽事務所」の若手スタッフとして、開演前にコンサートマナーを呼び掛ける役回りだった。

「すごい演奏が始まるよ、みんなで楽しもう。でも座って聴いてね」とか、簡単なことですけどね。当時は大物の来日公演なんか少なくて、ファンもまだ慣れてなかったから」

が、客席の照明を落とした途端、ファンはどっとステージに押し寄せた。「後ろの方はガランとなって」と、山崎さんは苦笑する。

その翌月、さらなる人気バンドが初来日した。キッズである。顔に奇抜なペイントを施したメンバーが繰り広げる演劇仕立ての派手なショーが売り。ただその分、ステージ機材は見たこと



第3回
大阪ウード音楽事務所社長
山崎敏一さん

洋楽文化実らせた「ロックの殿堂」。



キッス、ディラン、クラプトン……。山崎さんが手掛けた公演の記憶を語るコンサートパンフレットの数々。

フェスの協力あつてこそ、です」洋楽ロックのビッグアーティストが続々と来日する時代となった70年代。その多くを手掛けたのが、ウード音楽事務所。この分野では草分け的存在のプロモーター(興行会社)である。大阪常駐の数少ないスタッフだった山崎

さんは、ホルの確保、ラジオ局回りのプロモーション、アーティストの移動や宿泊の手配など、あらゆる仕事に奔走した。「忙しいけど楽しかった。洋楽を目本に根付かせる。田植え、みたいなものです(笑)」という。

「田植え」の重要な場の一つがフェスティバルホールだった。「名高いクラシックの殿堂に、ハードロックやパンクの連中だつて呼ぶわけですから、やっぱり気は遣います。でも本当にいろいろやらせてもらいました。大阪のロック会場といえばフェス、いわばロックの殿堂というイメー

ジができ上がったのは、フェスの懐の深さでしょうね」

山崎さんが関わったフェスティバルホールでの公演を並べると、ロックの歴史そのものだ。エリック・クラプトン、サンタナ、ジェフ・ベック、ポリス、クラッシュ、U2、そして山崎さんが最も敬愛するボブ・ディラン。

「これだけの音響と設備、それに品格を備え、ロックにも開放されているホールは海外にもないのでアーティストたちも感激するんです。クラプトンやステイニングあたりは特に気に入ってるんじゃないかな」

山崎さんは先日、建設中の新ホールに初めて足を踏み入れた。

「機材や設備は新しくなったけど、ホールが持つ威容というのか、殿堂の雰囲気はまったく変わってない。ここにまた、すごいアーティストを呼んできたいとひしひし感じました」

40年前に植えた洋楽文化の苗は豊かに実り、新しいフェスティバルホールで、新たな世代へ引き継がれてゆく。



2013年4月 オープン!
festival hall

www.festivalhall.jp/
提供／株式会社 朝日ビルディング